

外国語「新教育システム」実施報告

人文学部 福田一雄・桑原 聡・金子一郎

A Report on "The New System of Foreign Language Studies"

Kazuo FUKUDA, Satoshi KUWAHARA, Ichiro KANEKO (Faculty of Humanities)

In 1998 a new program for foreign language studies was started for the students of sciences and technology, the so called "new system of foreign language studies". This "new system" has two new main elements: intensive courses for English and German and an introductory lecture on the language and culture of Germany, France and Russia. To examine how this new system would function on the whole, in the end of the course a questionnaire was distributed to all students taking part in the first year. The result of this inquiry is published now for the open discussion in respect to the general reform of language teaching at Niigata University.

Key words: new system of foreign language studies, intensive courses for English and German, introductory lecture on the language and culture

内容

- I 外国語「新教育システム」の概要
- II 学生のアンケート調査報告
 - 1 英語集中コース
 - 2 「言語文化基礎」とそれに接続する「初修外国語 I」
 - 3 集中初修外国語（ドイツ語集中コース）

けたいと希望する外国語の重点的な履修を可能とすると同時に、他方初修外国語のどの言語を履修すべきか決めかねている学生が増加している現状に鑑みて、いわば道先案内として各々の言語と文化を学ぶことの意義と魅力を解説し、意欲ある学習への取り組みへ繋げることを図った。以下に「新教育システム」の概要を示す。

1 外国語の卒業要件単位と履修のパターン

I 外国語「新教育システム」の概要

平成10年度から理・工学部で実施されている「新教育システム」の最大の特徴は、これまでの全学生一律の教育制度を廃し、外国語教育の多様化に向けて一歩を踏み出したことにある。

このシステムは、そもそも言語教育はこれを学ぶ言語主体の意欲を抜きに実効をあげることはできない、という基本的な考え方から出発し、外国語に対するもともと一様ではあり得ない学生の関心と意欲に対応しながら、これらの一層の喚起と掘興しを企図したものである。即ち、特に力を付

卒業要件単位の規定はこれまでの一律既修4単位＋初修4単位に代えて、「既修外国語2単位と初修外国語2単位を含む計8単位」と改訂され、これによって学生は以下の三通りの履修パターンのなかから希望に従って選択することになった：

a) 英語の学習に重点をおいた場合

英語6単位 ＋ 初修外国語2単位

b) ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、

朝鮮語、スペイン語のうち一外国語の学習に重点をおいた場合

英語2単位 ＋ 初修外国語6単位

c) 二外国語を均等に学習する場合

英語 4 単位 + 初修外国語 4 単位

2 集中コースと「言語文化基礎」

「新教育システム」の特徴は単に 2 外国語の単位数を流動化したことにあるのではなく、一方で外国語の重点的学習を、他方で学生の意欲的な取り組みを促すためにそれぞれ新たに開設された履修コースに見ることができる。即ち通年 6 単位の集中コースと講義科目「言語文化基礎」である。

以下にこれらのコースの概要を記す：

・英語集中コース (Intensive Course)

1 クラス 30 人の規模で 3 クラス開設、週 3 コマで通年 6 単位のコース。

外国人講師による英会話・英作文の授業やコンピュータを用いたリスニング・英作文の授業、および講読を通じて、発信型のコミュニケーション能力を中心としてレベルの高い総合的な英語力の養成を目指す。

平成 10 年度は計 90 人の定員に 99 人の希望があり全員を収容した。これは全英語履修者の 13 %にあたる。

・ドイツ語集中コース

1 クラス 30 人の規模で 2 クラス開設、週 3 コマで通年 6 単位のコース。

入学時に既にドイツ語学習に高い意欲を持つ学生のためのコースであり、週 3 回の授業のうち 2 回を日本人教員が、1 回をドイツ人教員が担当する。ドイツ語の初歩から始めるが、文法の習得に終始するのではなく、様々なトレーニングを通じて一年間で読み、書き、話し、聞く四能力の中級レベルに到達する。この集中コースの目指すところは使えるドイツ語である。

平成 10 年度は 45 人がこのコースで履修したが、これは全ドイツ語履修者の 16 %に当たる。

・「言語文化基礎」

1 クラス 90 ~ 100 人規模の講義科目。第 I 期

のみ開講し、単位数は 2。学生は受講後、第 II 期に希望する外国語を履修することができる。

入学時に初修外国語のどの言語を履修したらよいか決めかねている学生、外国語学習に意欲を見いだせない学生、また予め複数の言語の特徴を知り、比較文化的な考察に関心のある学生を対象にした、これまでにない新たなコンセプトの下に実現したコースである。また英語を 6 単位修得し、初修外国語を 2 単位だけ取得する学生もこのコースを履修する。

学生はドイツ語、フランス語、ロシア語のヨーロッパ系 3 言語の発音、文法の基本的特徴を学ぶ。また学部の専門分野と各言語の関わり、各言語と文化の持つ特質や魅力などを理解する。これらの情報に基づいて、自分により適した外国語を第 II 期に開講される初級外国語コースから選択し、履修することができる。

当コースの平成 10 年度の履修者は 274 名で、これは初修外国語履修者全体の 36 %を占める。

II 学生のアンケート調査報告

新システムが現実にどのように機能し、学生にどのように評価されているかを調査するために学期の終わりにアンケートを行った。その結果を以下に記す。

1 英語集中コース

1) アンケート結果の概評

理・工向け英語集中コースの代表的な組立は、英語 Ia (一人の日本人教員が週 1 回前・後期で実施) と、週 2 回の英語 Ib (たとえば、前期週 2 回、同一の日本人教員によるコンピュータ利用のリスニング・英作文クラス、後期週 2 回、同一の外国人教員による会話のクラス) との組み合わせであり、学生は週 3 回、計 6 単位分の英語授業を受けることになる。

まず、学年末に 3 クラス (理クラス 1、エクラ

ス2)で実施したアンケートの結果(表1-本報告末尾に添付)を参照されたい(アンケート集計は人文学部駒形助手の協力を得た)。

質問(2)から、英語集中と組み合わせる初習外国語としては言語文化基礎が圧倒的に多いことがわかる。質問(3)からは、なぜ英語集中コースを選択したかについて、「英語力をつけたい」という積極的な理由が大半を占めていることがわかる。質問(4)は解答にばらつきがある。この点については後で触れる。質問(5)では週3回の授業回数を「ちょうどよい」とする学生が大多数である。質問(6)では集中を選んで「とてもよかった」と「よかった」が多数を占めている。質問(7)の結果の解釈は簡単ではないが、一応、学力が「著しく向上」と「少し向上」をあわせると半数弱になる。質問(8)から、2年次以降もできれば英語の授業を受けたいとする学生が大多数であることがわかる。このことは英語集中コースを受講することにより、英語が好きになった学生や英語学習の重要性を自覚するようになった学生が多いことを示している。「英語はもう結構」という英語嫌いはごく少数となっている。

2) 学生の自由意見

3クラスでのアンケートの自由意見の主なものをまとめると次の通りである。

〈肯定的評価〉

- (1) ネイティブの発音で英語を学べたのがとても良かった。
- (2) 高校の受験のための英語とは違った形で英語や文化に親しめた。
- (3) コンピュータ英語の教材 Quick English はとても良かった。
- (4) 英語 Ia では読解、Ib ではリスニングとバランス良く身につけることができて良かった。
- (5) 今後も英語を勉強したい人のために集中コースを是非残して欲しい。
- (6) 英語 Ib によってリスニングの力がついたと

思う。

- (7) 英語週3回はちょうど良い。
- (8) 読解力がついた。
- (9) コンピュータを用いた英語授業は集中できるので是非続けて欲しい。
- (10) 今後、このような英語集中コースをもっと増やして欲しい。
- (11) 英語 Ia が週一回、Ib が週2回というのはちょうど良かった。
- (12) 英語を勉強しているという実感があった。
- (13) ネイティブの授業はとても楽しかった。

〈否定的評価、提案、要求など〉

- (1) もっとネイティブの授業を増やして欲しい。
- (2) TOEFL や TOEIC の練習をもっとやりたかった。
- (3) コンピュータを使った授業では授業時間外にもっと練習したかった。
- (4) 英語 Ib は前期と後期で先生が変わるが、変えないで一人の先生で通年やって欲しいかった。
- (5) ネイティブの授業でスピーキングの練習を充分やるためには、もっと少人数にすべきである。
- (6) コンピュータ英語の授業は変化に乏しくつまらなかった。
- (7) 英語 Ia では新聞などの時事英語が読みたかった。
- (8) 1年次の英語はレベル別編成にすべきだ。学生間のレベルが違い過ぎる。
- (9) ネイティブの英語をすべて聞き取るのが難しいから、日本人の先生とのチーム・ティーチングにして欲しい。
- (10) 週3回を異なる3人の先生で一コマづつ通年担当でやった方が良い。
- (11) ネイティブの授業は楽しかったが、学生側の態度が真剣味に欠ける場合もあった。
- (12) 授業中、もっと会話の機会を増やして欲しい。

- (13) 事前に、集中英語コースの趣旨説明をもっと詳しくやっておくべきだ。
- (14) クラス人数を10人くらいにしないと緊張感がない。
- (15) 全体として、もっと内容の濃い、難度の高い授業を望む。
- (16) ネイティブの授業に物足りなさを感じた。
- (17) 課題をスムーズにこなすことだけに専念するようになっていた。(つまり頭を働かせて思考することがなかったという意味か?)
- (18) リーディングの教材が私にとってはつまらなかった。
- (19) 高校の英語の方が中身が濃かった。
- (20) Iaでは一冊のテキストだけでなく、いろんな分野の英語が読みたかった。
- (21) 週3回の授業をすべてネイティブにすべきだ。英語はスピーキングができなければ意味がないからだ。
- (22) リスニングは向上したがスピーキングは伸びなかった。

3) 全体的に言えること

全体として、英語集中コースの試みは学生に歓迎されていると言ってよい。本当に英語の力をつけようと思えば、内容の充実した授業を週3コマ～4コマ実施するのが理想であろう。アンケートでも、読解を中心とする英語 Ia (週1コマ)、リスニング、英作文、会話を中心とする英語 Ib (週2コマ) の組み合わせによる集中コースは多くの学生の支持を得ている。集中コースを選ぶ学生は総じて学習意欲が高く、上記のように内容充実への提案、要望も多岐に渡る。今後、集中コースを増やして欲しいという要望も傾聴に値する。

4) 今後の課題

英語の場合、中学・高校からの連続であるため、学生の能力や英語に対する好き嫌いの点でかなりばらつきがある。当然、すべての学生のニーズに応え、すべての学生の能力を伸ばすというのは至

難の業である。そのような状況を前提にしつつも、当然、大学での英語教育は高校までの英語とは質とレベルの点でより高度なものでなければならぬ。以下において、今後の課題について考えてみたい。

(1) 英語 Ia は基本的にこの形で良いと思われるが、選ぶテキストの難易度に注意したい。特にあまり簡単過ぎるのは良くない。一冊のテキストでも良いが、できればプリントなどを使って、いろんな分野の英語を多読させることも必要であろう。学生がもっとも嫌がるのは「全訳」の授業であろう。全訳しないで、どうすれば内容の読解、把握が可能になるかについて研究を重ねる必要がある。多読・速読練習や、学生個人の興味に従っているような英文を読んでこさせ内容を発表させるなどの工夫も試みる価値がある。またグループでのプロジェクトを中心にした読解指導といったものを実施できないだろうか。内容のあることを主体的に考えることができるような授業を目指したいものである。

(2) コンピュータ利用の教材 "Quick English" を用いた Ib の授業は肯定的評価が多いが、一方で単調な授業になりがちなので、工夫が必要である。リスニング練習、課題英作文に加えて、自由会話、映画を使つての聞き取り、英語の歌の聞き取り、TOEFL や TOEIC の練習などといった工夫が必要である。

さらに重要なことの一つは、まず前期にこのコンピュータ英語をやり、そのあと後期にネイティブの会話授業を実施すべきだということである。平成10年度は筆者のコンピュータ英語のクラス(表1の工学部 B)だけがたまたま後期実施であった。前期がネイティブの授業であったため、望ましい順番とは逆になった。ネイティブの授業は real interaction であるが、コンピュータ英語はなんと言つても virtual reality の世界である。その結果筆者担当のクラスではアンケートの間(4)において、「もっとネイティブを」が多数となった。学生の反応としては当然である。

筆者は、しかし、一つ参考になるデータを得た。

毎年、同一の問題で実施している TOEFL 練習テスト(1)の成績の比較である。本学の『大学教育研究年報』第4号43～58頁に「コンピュータを用いた英語授業の試み」(大石、秋、福田、駒形)が掲載されているが、その55頁の表2(TOEFL第1回と第2回の比較)を参照されたい。同表には集中コースを実施する前年の工学部一年生コンピュータ英語クラスの TOEFL(1)で測定した学期初めと半年後の成績の伸びが示されている。それと平成10年度の筆者の工学部一年コンピュータ英語クラスでの測定結果を比較してみる(リスニング能力のみを測るものであり、50問で50点満点である)。

表2 (集中コース実施以前と実施後の TOEFL 練習テストの得点比較)

	第1回 (10月)	第2回 (1月)	伸び —
平成9年度 エクラス 集中実施以前	16.66	17.61	0.95
平成10年度 エクラス 集中コース	19.06	21.07	2.01

表2の筆者の平成10年度クラスは、前期に週2回ネイティブの授業を受けてきている。10月の第一回の時点ですでに2.4点平成9年度を上回っている。伸び率も1.06点上回った。ちなみに第2回目の21.07は平成9年度の人文学部向けコンピュータ英語クラスの10月時点での20.76より上である(なお人文クラスの1月時点は23.12)。このことから少なくとも、リスニング能力に関する限りでは、集中コースでのネイティブ起用は成功していると言ってよい。

(3)アンケートでは、ネイティブの担当の授業は大変楽しいものの、教員との会話の機会が少ないことが指摘されている。会話の練習のためには30名は確かに多すぎる。10名前後が理想であろう。学生の英語能力に差があり過ぎることも指摘され

ている。学生の会話やリスニング能力不足が引き金になり、授業自体が学生の大学生としての知的レベルをはるかに下回る内容になるおそれが常にある。内容を伴った言語活動がやれるように一層の工夫が必要である。

(4)最後に、重要なことを一つ付け加えておきたい。集中コースはネイティブを含めて3名の教員が担当するのだが、コース全体として、何を目標にして、どんな授業を展開するのかといったことを3名の間で打ち合わせをしておく必要がある。さらに、集中コースに限らず、本学の英語教育をどのように発展させて行くかについて話し合うべき機会がきわめて少ないのが現状である。平成10年度までは、「新潟大学外国語教育研究会」が一定そのような機能を果たしていたが、その会も解消した今、本学の英語教育、さらには外国語教育全体について、すべての非常勤講師と専任教員が少なくとも年に1、2度は一堂に会して話し合う必要があると思われる。

2 「言語文化基礎」とそれに接続する「初修外国語I」

a) 言語文化基礎

このコースは平成10年度1クラス平均90人の規模で3クラス開講され、それぞれドイツ語、フランス語、ロシア語を5回ずつ受講した。講義による外国語教育というこれまでにない新しい試みであるが、これまでのところ総じて学生の受講態度、学習意欲は良好であり、私語、居眠りなど通常の講義風景に慣れている担当者にとっても予想外の手応えがあった。その理由は、「授業へのコメント」として提出させたアンケートの集約結果を手がかりに推測すれば以下の三点に求めることができると思われる。

①大学入学時に英語以外の一外国語を選択する判断基準がない。従って予め複数の外国語についてその概要を学んでおくことの意義が、つまり次のステップへの不可欠な予備作業としての意義が了解されている。②言語と文化の特質を学ぶことに

より、目的意識を伴う言語習得に期待がある。③短期間でドイツ語、フランス語、ロシア語のヨーロッパ系3カ国語の発音と基本文型などを修得できる。

①と②について：

70%近い学生がこの予備作業としての利点を挙げた。本来なら外国語選択に必要な最低限の情報も、一昔前までそうであったように、高校卒業時まで各自が何らかの方法で入手しておくべきである、とすることもできよう。しかし他方この背景には近年の日本社会における異文化に対する需要と受容のあり方に大きな変化があったこと、そして学生のいわゆる「外国語離れ」もこの変化の所産であることも見据えておかなければならないだろう。この事情に配慮し得なかったところにこれまでの外国語教育の限界があったように思われる。更に換言すれば、英語以外の外国語を学ぶことは多数の学生にとって最早以前のように自明なことではなくなっている、従って実効ある外国語教育を企図するならば、先ずその意義を学生に了解させる作業から始めなければならなくなった、とも言えよう。このことは「言語文化基礎」コースを希望した学生が3人に1人にのぼることからも窺うことができる。

アンケートのなかから代表的なものを幾つか挙げてみよう：

・「大学に入っていきなりフランス語やらドイツ語やらを選べと言われると思って、高校の時は何を選ぼうか迷っていた。だが、言語文化基礎という授業があって半年間選ぶ期間が与えられてほっとした。それに授業を受けてみて、英語とフランス語、ドイツ語との違っているところ、似ているところが良くわかってよかった。」

・「1期で3カ国語の基本を学ぶというこの授業形式はとても面白いと思う。入学時にこれからやる外国語を一つに絞れというのはやはり無理だ。」

・「この講義を聞いたので、聞かなかったときよりも後期の第2外国語を勉強しているときに”迷い”がないために集中して学習できるのではない

かと思っている。」

・「これまで良く知らなかったフランスの文化に興味を持った。後期はフランス語にしたいと思う。」

とくに②の「目的意識を伴う言語習得に意欲がある」に関連して最も成果があったのはロシア語である。「新システム」導入以前の平成9年度にロシア語履修希望者は理・工学部の全学生のうち僅か6人と1%にも満たない規模であったが、平成10年度は35人とほぼ6倍に達した。

③の「短期間で3カ国語の概要を修得できる」については、このことが学生の関心と意欲を引き出すことになるとは担当者としてさほど期待していないことであった。

・「言語文化基礎の授業は各外国語5回の講義だけだけれど、それぞれにおもしろい。はじめはフランス語、つぎにドイツ語、ロシア語とぜいたくである。講義もただ教わったことを頭に詰め込むだけでなく、進んで自分からやりたいと思えるような講義だったのでよかった。」

・「ドイツ語の文章を書けるまでになったことはすごいと思う。これでフランス語とロシア語の3カ国語にさわったわけだが、ぜいたくだと思う。」

・「こんなにいい第二外国語はないと思った。友だちからは3つの言語を勉強できるのでとてもうらやましがられている。」

その存在については自明のこととして知っているが、その具体的な姿となると全然見当がつかない対象、即ちこの場合ドイツ語、フランス語、ロシア語をたとえ入門レベルの概要においてであれ一応「さわった」ことがある種の満足（「ぜいたくである」）に結びついているようである。このことは一見学生が外国語学習に一定の期待を抱いているようにも思わせるが、予想できることは、この講義が短期間ではなく通年で一定の言語能力の修得を目的として行われるとしたら、学生の反応は違ったものになるであろうということである。

次にこの講義への注文ないし批判的なコメントは以下の二点に絞られる。一つはドイツ語、フランス語、ロシア語の他に中国語、朝鮮語などアジア

ア系の言語も対象とすべきだ、そして可能ならば3カ国語の組み合わせを学生が選べるようにすべきだ、というものである。この点については先ず「新システム」の制度としての成熟を図りながら、実現に向けて検討することになるだろう。

もう一つは少数ながら「一度に複数の外国語を学ぶので、混同してしまう」、「一外国語5時間しかないのではどれも中途半端になってしまう」というコメントであった。予想はしていたことであるが、これらは「新システム」の制度としての限界にかかわることであり、批判というよりむしろ苦情と受けとめざるを得ない。

b) 初修外国語 I

1) アンケートの集約とその評価

言語文化基礎に接続する第二期開講の初級外国語 I に関しては17項目について学生に尋ねた。アンケートの体裁は以下の通りである。

理・工学部向け初修外国語 I のためのアンケート

理学部・工学部向けの第二期初修外国語 I (ドイツ語、フランス語、ロシア語) は今年度から開設された新しいコースです。このコースをより充実したものにしていくために以下のアンケート調査にご協力下さい。このアンケートの結果が成績評価などの参考とされることは一切ありません。

選択肢のなかであてはまるものを選択し、イロハを○で囲んで下さい。

質問(1)所属の学部を教えてください。

- (イ)理学部
- (ロ)工学部
- (ハ)その他

質問(2)このコースをとることをいつの時点で決めましたか。

- (イ)学部から配布されたパンフレットを参考に入学前に
- (ロ)「言語文化基礎」講義を聴講したあとで
- (ハ)その他

質問(3)あなたが現在履修している初修外国語は何ですか。

- (イ)ドイツ語
- (ロ)フランス語
- (ハ)ロシア語

質問(4)あなたがこの外国語をとろうと決めたのはいつの時点ですか。

- (イ)学部から配布されたパンフレットを参考に入学前に
- (ロ)「言語文化基礎」講義を聴講したあとで
- (ハ)その他

質問(5)あなたの英語の取得予定単位数は?

- (イ)2単位
- (ロ)3単位
- (ハ)4単位
- (ニ)5単位
- (ホ)その他 単位

質問(6)第一期「言語文化基礎」講義をとったうえで、なお後期であなたがこの外国語を学ぼうとした理由を教えてください。(複数回答可)

- (イ)「言語文化基礎」講義を聴いて、この外国語に興味湧いてきたから
- (ロ)「言語文化基礎」講義だけではものたりなかったから
- (ハ)英語が嫌いなので、初修外国語で4単位を取得しようと思ったから
- (ニ)第二期には初修外国語 I をかならずとらなければいけないと思っていた
- (ホ)その他

質問(7)この授業の難易度は、あなたにとってどうでしたか。

- (イ)大変難しい
- (ロ)難しい
- (ハ)大体わかる
- (ニ)良くわかる
- (ホ)大変良くわかる

質問(8)この授業の進度は、あなたにとってどうでしたか。

- (イ)大変はやかった
- (ロ)はやかった

(ハ) ちょうどよかった

(ニ) 遅く感じた

質問(9) あなたはどのくらいこの授業に出席しましたか。

(イ) ほぼ毎回出席した

(ロ) 2/3 くらい出席した

(ハ) 1/2 くらい出席した

(ニ) その他

質問(10) 予習・復習について質問します。

(イ) ほぼ毎回

(ロ) 1/2 くらい

(ハ) 当てられそうなきだけ

(ニ) ほとんどしなかった

質問(11) 第二期週二回の授業回数をどう思いますか。

(イ) 大変短すぎる

(ロ) やや短すぎる

(ハ) ちょうどよかった

質問(12) 授業内容をどう感じましたか。(複数回答可)

(イ) もっと文法を

(ロ) もっと会話を

(ハ) もっと作文を

(ニ) もっと和訳を

(ホ) もっと説明を

(ヘ) もっと練習問題を

質問(13) この外国語の力はつきましたか。自分ではどの程度だと思えますか。(A、B から各一を選択)

A(イ) 正しく発音でき、綴ることができる

(ロ) 大体発音でき、綴れる

(ハ) 発音できない

B(イ) 辞書を引いて文章を読めることができる

(ロ) 辞書を引いて何とか文章を読むことができる

(ハ) 辞書を引いても文章は読むことができない

(ニ) 何語であるかが分かる程度で、意味は分からない

(ホ) その他

質問(14) これまでを振り返ってみて、このコースを選択したことを現在どう思っていますか。

(イ) とてもよかったと思う

(ロ) 良かったと思う

(ハ) まあまあだった

(ニ) 後悔している

質問(15) 質問(14)で(ニ)「後悔している」と答えた人に質問します。もしこのコースでなければ、どのコースをとった方がよかったと思っていますか。

(イ) 集中ドイツ語 I/II

(ロ) 初修外国語 I/II

(ハ) 「言語文化基礎」のみ

質問(16) 今後も機会があればここで学んだ外国語の授業をとっていきたいと考えていますか。

(イ) 是非とりたい

(ロ) 時間の都合がつけばとりたい

(ハ) とるつもりはない

質問(17) この授業をうけての感想(良かったと思う点、悪かったと思う点、改善を希望する点など)を聞かせて下さい。

このアンケートには総受講者 196 名(ドイツ語 153 名、フランス語 25 名、ロシア語 18 名)のうちドイツ語受講者 61 名、フランス語受講者 23 名、ロシア語受講者 12 名の計 105 名が答えてくれた。この結果から読みとれることを幾つか取り上げてみたい。

まず、言語文化基礎と初修外国語 I のコースの選択時期については、およそ半数の学生(48 名)が入学前に決めており、残りの半数(47 名)が言語文化基礎講義を聴講した後に初修外国語 I の履修を決めたと答えている。またどの外国語を選ぶかについては圧倒的多数の学生(86 名)が講義聴講後に決定したと回答している。この事実から、外国語選択に当たって予め十分な情報を与えていない学生に判断材料を提供するという言語文化基礎講義の狙いは充分果たされたと言えるだろう。さらに講義聴講後に初修外国語 I を選択した学生が約半数いたということから、言語文化基礎講義が学生の外国語学習の意欲を喚起したという結論を導き出したいところであるが、必修と勘違

いた学生の数がおよそ三分の一（33名）に達している。（この問題点については後で触れる。）それでも約三分の一（32名）の学生が講義を聴講して外国語に興味を持ったと答えていることからすると、この講義が学生の主体的関心を起こさせるのに一定の役割を果たしたとは言えるであろう。

言語文化基礎講義が学生が初修外国語を選ぶ際にオリエンテーションの役割を果たし関心を引き起こす役割を果たし、また学生に概ね好意的に受け入れられたとすると、それに接続する第二期初修外国語Ⅰの評価は幾つかの問題点を浮き彫りにしている。

もっとも深刻な問題は、難易度と進度に関わる。授業が「大変難しい」および「難しい」と感じた学生が過半数（56名）を越え、進度が「大変はよい」ないしは「はよい」と感じた学生が55名に及んだ。従来一年間かけて教えてきた内容を半年間で行うことの無理は予想されていたものであり、教師の側からは教えるにあたって重要項目に限るという配慮を行ったにもかかわらず、依然として学生側の印象と教師の側の教育目標設定には大きな隔たりがあったと言わざるをえない。49名の学生が授業に「もっと説明を」と望んでいることからしても、学生にとって授業が十分に咀嚼し切れないうちに進められた様が推測できる。他方、学力について53名の学生が「正しく発音でき綴ることができる」ないしは「大体正しく発音でき綴ることができる」と答え、69名の学生が「読める」または「大体読める」と回答していることは、彼らの実感としては授業は大変だったけれども主観的には力がついたと感じていることの現れであろうか。45名の学生がこのコースを選択して「とてもよかった」または「よかった」と答え、「まあまあ」も併せると89名に及んでいることはこのことを示唆しているように思われる。

さて、授業をどのように形づくるかについては、事は、時間数が半減したから教える内容も半分になればよいという単純なものではない。というのも学生が学んだという達成感を得られるように努める必要がある一方、半減した時間数の中で何を

教えるか、すなわち、何を最重要と考えるかということに関わるからである。

この点は後で述べることにして、最後に質問(17)の、学生による初修外国語Ⅰについての感想に触れたい。

「言語文化基礎講義を受けてから外国を選択でき本当にやりたかった外国語ができてよかった」、また「英語以外の外国語を学ぶことで、英語以外の文化圏の言語、文化を知ることができてよかった」という感想が複数あった。前者についてはすでに触れたが、英語が世界の唯一の言語ではないという認識を学生がもてることをも新システムの一つの狙いとしていたので、この点でも新システムは一定の成果を挙げたと言えるであろう。但し、一クラスを除いて、上で述べた問題点が感想においても現れていた。すなわち、言語文化基礎講義に続く個別外国語の学習において、「進度が速い」、「内容が難しい」、「説明が足りない」という感想がかなり見られた。また初修外国語を学ぶことの意義を認めつつ、「本格的に学ぼうとしない人にとっては、あまり暗記による文法事項の理解はあまり意味をなさないと思う。今後、学ぶことがなければ忘れていくからだ。（このような人がどれくらいいるかは問題だが、かなりの数いると思う。）むしろ、外国語を学ぶと共に、文化等も学ぶようにするとよいのではないか」とする意見があった。学生に阿る必要はないが、学生の関心に応えようとする、さらなる努力が教師の側に要求されていることを示す例と言えよう。

2) 教員の側からのコメント

初修外国語Ⅰを開設するにあたっては二つの問題があった。一つは聴講希望学生数の予測が難しく、何クラスを用意したらよいかというものであり、もう一つは第二期週二回という従来の方の半分の授業時間数で何を教えるべきか、またどれだけのことが教えられるかということであった。

第一の問題については、一昨年度に行った事前アンケートで言語文化基礎講義の定員300名のうち約100名弱が英語を6単位履修するであろうと

予測したが、残り 200 名のうちどのくらいの学生が初修外国語 I を希望するかを予測するのが悩みの種であった。従来の理学部・工学部の学生の履修状況からフランス語、ロシア語についてはそれぞれ一クラス（40 名）を用意し、ドイツ語については二ないし三クラスで十分であろうかと考えたが初年度の混乱を避けるため多目に見積もり四クラス（160 名）を用意した。結果的にはフランス語 25 名、ロシア語 18 名、ドイツ語 153 名であり、ドイツ語に関しては予想外の多さであった。これには上に述べたように初修外国語 I を選択必修と考えた学生がおよそ三分の一いたことが原因であろう。しかし、三分の一を引いたとしても 100 名強もの学生が自由意志で初修外国語 I を選択したことは、外国語離れ、外国語嫌いが言われる昨今瞠目すべき事柄である。今年度以降の聴講希望者がどのように推移するかは今後の動向を見守らなければならぬが、初年度の結果は「言語文化基礎講義＋初修外国語 I」というコースが理学部・工学部の学生に受け入れられまた機能し得ることを強く示唆しているように思われる。

第二の問題である授業時間の半減はわれわれを最も悩ました点であった。従来の週二コマ通年の授業では文法を終え、さらに「読む」「書く」「聞く」「話す」の練習を若干加えることができた。初修外国語の基礎を確かなものにするにはもとよりこれでも十分ではないが、一年間の達成度としては概ね妥当なところであろう。しかし半年週二コマという授業形態はわれわれを新たな問題に直面させた。すなわち半年間で何を伝えるべきかが問われたのである。週二コマ通年の授業であれば授業をどのように組み立てようとも一通りの文法を終えるということが前提できたが、新しい授業形態ではそれは無理であることは明白であった。新システムを導入するにあたってこの点についてもっとも激しい議論が行われた。初修外国語の基礎を教えることも保証できない制度は導入すべきではないという主張も最後まで強かった。しかし、他方、現代において、学生に初修外国語を学びたいかどうかを選択させずまたどの外国語を学びたい

いかについて前もって十分に判断材料も与えずひたすら教師の側から「必要だから」という理由で外国語学習を強制することに限界があるということも明らかであった。結局新システム導入に踏み切ることになったのだが、授業内容をどのように考えるかについては教えるにあたっては重点に限るということ以外に議論を煮詰めることはできなかった。初年度は各教員が試行錯誤を行ったというのが実状である。ここに学生側の要望と教師の側の目標設定に大きな隔たりがあった原因が存する。学生が言語文化基礎講義によって英語以外の外国語に対する関心を喚起され自ら外国語を学ぶことを決めるこのコースにあっては、教師が一方的に目標を設定するのではなく学生の要望に耳を傾けることがとりわけ必要とされるように思われる。われわれはアンケートの結果を重大に受け止めこのコースをさらに実りあるものにしていく所存である。

3 集中初修外国語（ドイツ語集中コース）

1) アンケート結果

言語文化基礎講義＋初修外国語 I のコースの開設と集中初修外国語の開設は一体である。未だどの初修外国語を学ぶかを決めかねている学生に情報を与えるのが前者であるとする、後者は、既に学びたい外国語がはっきりしておりなおかつ集中してそれを学びたい学生の要望に応えるものである。昨年度は初年度ということもありまたスタッフの関係上ドイツ語のみ開講した。

初修外国語 I 同様集中初級ドイツ語においても学期の終わりにアンケート調査を行った。アンケートの体裁は初修外国語 I と大差ないが、以下にそれを記す。

集中ドイツ語授業のためのアンケート

理学部・工学部向け集中ドイツ語は今年度から開設された新しいコースです。このコースをより充実したものにしていくために以下のアンケート調査にご協力下さい。このアンケートの結果が成

績評価などの参考とされることは一切ありません。

選択肢のなかであてはまるものを選択し、イロハを○で囲んで下さい。

質問(1)所属の学部を教えてください。

- (イ) 理学部
- (ロ) 工学部
- (ハ) その他

質問(2)このコースを選ぶとき何を参考にしましたか。

- (イ) 先生・両親・友だちの意見
- (ロ) 学部から入学前に配布されたパンフレット
- (ハ) その他

質問(3)あなたがこのコースを選んだ理由は何ですか。(複数回答可)

- (イ) 集中だから
- (ロ) ドイツ語だから
- (ハ) 英語が嫌いだから
- (ニ) ドイツ人教師の授業がとれるから
- (ホ) 第一志望から回されて

質問(4)あなたの英語の取得予定単位数は?

- (イ) 2単位
- (ロ) 3単位
- (ハ) 4単位
- (ニ) 5単位
- (ホ) その他 単位

質問(5)この授業の難易度は、あなたにとってどうでしたか。

- (イ) 大変難しい
- (ロ) 難しい
- (ハ) 大体わかる
- (ニ) 良くわかる
- (ホ) 大変良くわかる

質問(6)この授業の進度は、あなたにとってどうでしたか。

- (イ) 大変はやかった
- (ロ) はやかった
- (ハ) ちょうどよかった
- (ニ) 遅く感じた

質問(7)あなたはどのくらいこの授業に出席しましたか。

- (イ) ほぼ毎回出席した
- (ロ) 2/3くらい出席した
- (ハ) 1/2くらい出席した
- (ニ) その他

質問(8)予習・復習について質問します。

- (イ) ほぼ毎回
- (ロ) 1/2くらい
- (ハ) 当てられそうなときだけ
- (ニ) その他

質問(9)週3回の授業回数をどう思いますか。

- (イ) 多すぎた
- (ロ) ちょうどよかった
- (ハ) 少なすぎた
- (ニ) その他

質問(10)日本人教師週2回+ドイツ人教師週1回の組み合わせをどう思いますか。

- (イ) もっとドイツ人の授業を
- (ロ) ちょうどよかった
- (ハ) 必ずしもドイツ人教師でなくてもよい

質問(11)授業内容をどう感じましたか。(複数回答可)

- (イ) もっと文法を
- (ロ) もっと会話を
- (ハ) もっと作文を
- (ニ) もっと和訳を
- (ホ) もっと説明を
- (ヘ) もっと練習問題を

質問(12)ドイツ語の力はつきましたか。自分ではどの程度だと思えますか。(A～Dから各1を選択)

- A (イ) 正しく発音でき、綴ることができる
(ロ) 大体発音でき、綴れる
(ハ) 発音できない

B (イ) 辞書を引いて文章を読むことができる

- (ロ) 辞書を引いて何とか文章を読むことができる
- (ハ) 辞書を引いても文章は読むことができない
- (ニ) 何語であるかが分かる程度で、意味は分からない
- (ホ) その他

C (イ) 短いセンテンスの文は聞き取れる

(ロ) 簡単なドイツ語の作文ならある程度可能だ

(ハ) まったくできない

質問(13) これまでを振り返ってみて、このコースを選択したことを現在どう思っていますか。

(イ) とてもよかったと思う

(ロ) よかったと思う

(ハ) まあまあだった

(ニ) 後悔している

質問(14) 質問(13)で(ニ)「後悔している」と答えた人に質問します。もしこのコースでなければ、どのコースをとった方がよかったと思っていますか。

(イ) 初修外国語 I/II

(ロ) 「言語文化基礎講義のみ」

(ハ) 言語文化基礎講義+初修外国語 I

質問(15) 今後中級ドイツ語などの授業をとっていきたいと考えていますか。

(イ) 是非とりたい

(ロ) 時間の都合がつけばとりたい

(ハ) とるつもりはない

質問(16) この授業をうけての感想(良かったと思う点、悪かったと思う点、改善を希望する点など)を聞かせて下さい。

このアンケートには二クラスの総受講者 45 名のうち 31 名(19 名と 12 名)が回答してくれた。結果から読みとれることを幾つか記したい。

「集中ドイツ語選択時に何を参考にしたか」については「学部からのパンフレット」という理由が圧倒的であった。(27 名)集中ドイツ語を選んだ理由については「集中だから」が 12 名、「ドイツ語だから」が 13 名であり、さらには「英語が嫌い」という消極的理由が 7 名あった。「英語が嫌い」という理由は初修外国語 I においても 27 名と四分の一にも達しており、高校までの英語授業に対する学生の批判として注目に値する。

授業についての学生の印象は以下の通りであった。

難易度については一つのクラス(19 名)が「大

変難しい」が 3 名、「難しい」が 9 名いたのに対し、もう一つのクラス(12 名)では前者が 0 名、後者が 2 名であった。これと恐らく関連しているのが授業内容についての質問中「もっと説明を」と「もっと文法を」の項目であろう。「もっと説明」を求める学生数は前者が 9 名、後者が 2 名であり、「もっと文法」を求める学生数は前者が 5 名、後者が 0 名であった。また両クラスにおいて「もっと会話」を求める学生が前者では 6 名、後者では 8 名に上っており、「もっとドイツ人の授業」を求める学生が前者では 4 名、後者では 6 名であった。このことは、集中コースでは文法理解と共に実践能力に対する欲求が強いことを示しているであろう。これは初修ドイツ語 I との際だった違いである。集中コースを希望する学生は、ドイツ語の実践能力の養成に強い関心を示しているように思われる。

授業の進度に関しては、両クラスとも「大変速い」ないしは「速い」が三分の二(22 名)に達している。「週 3 回の授業回数をどう思いますか」という質問に対しては両クラスともほとんどの学生が「大変短い」または「やや短い」と答えている。(30 名)このことは週三回の授業でも先に述べた彼らの欲求を満たすには不足であるということを示唆しているのであろうか。もしそうだとするならば将来的には週四回の集中コースの開設も考慮しなければならないであろう。

学力については予想通り一定の成果を収めることができたように思われる。「正しく発音でき、綴れることができる」または「大体発音でき、綴れることができる」と答えた学生はおよそ八割の 23 名、「読める」または「大体読める」と回答した学生は九割を越え 28 名、「大体聞き取れる」以上がおよそ八割の 23 名、「簡単なドイツ語の作文ならある程度可能」と答えた学生はほぼ全員の 30 名であった。担当教員が新システムの報告会で述べた通り、これは学生の自己申告であるからある程度割り引いて考える必要があるが、初修外国語 I と比べると学生の自己評価は著しく高くなっているとは少なくとも言える。集中コースを選択して

「とてもよかった」ないしは「よかった」と感じた学生はおよそ六割、17名であり、「まあまあ」を合わせると九割を越え29名であった。

以上の結果から集中コースはわれわれの期待以上に学生に肯定的に評価され、また成果を学生にもたらしたと結論できそうである。しかし、初修外国語Ⅰで触れたと同じ問題、すなわち学生の欲求と教師の教育目標設定の間に存するギャップが集中コースでも現れている。今後の課題として両者の擦り合わせは不可欠である。もう一つの問題として予想以上に途中放棄者が出たことも挙げられる。これも上に触れたギャップに原因を求めることができると思われるので、併せて考えていかねばならない事柄である。

質問(16)の感想については初修外国語Ⅰと同様な意見の他に目立ったものとしては次のものがあった。

「集中だけに週二回のドイツ語の授業を受けている人とは段違いにドイツ語を理解できるようになっていた。」

「ドイツ語の力をつけるには良い授業だったと思う。宿題は大変だった。・・・ドイツ人の先生の授業も楽しく受けられた。改善するとすれば会話の勉強を増やすと良い。」

「実用的な授業を中心にして文法を補佐したほうが良い。せっかく大学で初めての第二外国語を学ぶのだから、これまでの机上言語ではなく、もっと自由は言語学習を試みたいと考えるのは僕だけではないと思う。」

「英語が苦手な人たちの集まりだと思って、外国語を好きにするような授業を展開することが理想だと思う。今まで嫌いなものを好きにするには、大変な時間がかかり、それを満足させるのは、週三回の授業時間がある同コースのみであると思う。その点を考えて改善していただきたい。」

先の繰り返しとなるが、われわれには学生の声により耳を傾け、同時に易きに流されることなく初修外国語の授業全体をより良くしてゆく義務がある。

2) 教員の側のコメント

担当教員のコメントは学生のアンケート結果と比べて反省と批判をより強く表明している。少数であったのだから「もう少し目配りの利いた授業」が可能であったはずであり、「宿題の出し方、宿題の点検はもっと緻密」でなければならない、また「<日本にとってのドイツ>あるいは<ドイツにとっての日本>という観点での新聞・雑誌、テレビニュース(ZDF)などの映像資料を活用」すべきであったとするコメントがあった。しかし何よりも学生に向かっていく「迫力」こそが要求されていると指摘してこのコメントは終わっている。また通常のクラスと比べて集中コースの参加者の方が「意欲」があり、できるようになったという印象は受けないという、このコースそのものの存在意義に関わる感想もあった。

しかし、教員の側の感想・コメントにもかかわらず、初修ドイツ語Ⅰのアンケート結果と集中ドイツ語のアンケート結果には明らかに差異があったことは上に見たとおりである。それを学生の主観的「印象」にすぎないとして片づけることもできるであろうが、われわれの日々の経験は、学生の「印象」なるものが案外正鵠を射ていることをも教えてくれている。アンケート結果ですべてを決するのでもなく、またアンケート結果を無視するのでもなく、学生との対話を重ねつつ改善への地道な作業をこれからも続けて行く必要があるだろう。

添付資料 1 <表 1> (本文 7 頁参照)

Q E アンケート (工学部 1998/7/14) 30 人

1	授業のレベルについて	
	1. 高度過ぎた	3
	2. ちょうど良かった	26
	3. 低過ぎた	0
	4. その他	1
	<ul style="list-style-type: none"> ● 比較するものがないのでなんとも。 ● 少し偏りがある。 	
2	授業のスピードについて。	
	1. 速過ぎた	2
	2. ちょうど良かった	24
	3. 遅過ぎた	2
	4. その他	1
	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分でやるところが多かったので、気分次第でどうにでもなった。 	
	5. 無回答	1
3	リスニングの力がついたと思いますか。	
	1. 大いについた	0
	2. かなりついた	11
	3. あまりつかなかった	9
	4. 全然つかなかった	0
	5. その他	10
	<ul style="list-style-type: none"> ● よくわからない。(4) ● 前よりはついたと思う。 ● 特についたとは感じないがついたらう。 ● ついた。 ● そこそこついた。 ● すこしはついたと思う。 ● なんとなくついたような気がする。 	
4	英作文課題の難易度について。	
	1. 難し過ぎた	4
	2. ちょうど良かった	21
	3. 簡単過ぎた	4
	4. その他	1
	<ul style="list-style-type: none"> ● 1 だったり 3 だったり。3 はコンピュータのを写せばよかったから。 	
5	英作文の力がついたと思いますか。	
	1. 大いについた	1
	2. かなりついた	12
	3. あまりつかなかった	10
	4. 全然つかなかった	1
	5. その他	5

		<ul style="list-style-type: none"> ●よく分からないが、大して変わってないように思う。 ●忘れていた事もあったので、まあまあついた。 ●分からない。 ●そこそこついた。 ●すこしはついた。
	6. 無回答	1
6	教材について。	
	1. Quick Englishだけで充分	1 6
	2. Quick Englishに、他のリスニング教材をいくつか追加した方が 良い。	1 2
	3. まったく別のリスニング教材の方が良かった。	0
	4. その他	2
		<ul style="list-style-type: none"> ●Q.E.でも不便だとは思わなかったが、充分だとも思わなかった。 ●TOEICのようなものはよかった。
7	授業方法について（複数回答可）。	
	1. このままで良い。	1 9
	2. 授業中に、もっと学生の自学自習の時間をふやすべきだ。	4
	3. 教員主導型で、教員がもっといろいろなことをやるべきだ。	1
	4. 後期にネイティブ担当で練習ができるが、前期からもスピーキングの練習を取り入れた方が良い。	4
	5. もっと宿題を出すべきだ。	1
	6. 授業時間以外の空き時間に、この教材の自習ができるようにして欲しい。	9
	7. その他	1
		<ul style="list-style-type: none"> ●computer（あまり意味がない）を使用するよりは、LL教室等のヘッドフォン・マイク等を使用する方が望ましい。
8	TOEICのテストについて（複数回答可）	
	1. 難し過ぎた。	2 4
	2. 自分のリスニング・レベルを知ることができた。	1 5
	3. 思ったよりも、良く聞き取れた。	
	4. 今後もこのようなテストに挑戦したい。	8
	5. その他	1
		●なし
9	授業回数について。	

	1. このまま、同じ教材で週に2回の授業が良い。	2 2
	2. 同じ教材で、週3回くらいあった方が良かった。	8
	3. この授業は週1回として、もう一つ全く別の内容の授業をさらに週一回受けた方が良かった。	0
	4. その他	0
10	自分の、今後の英語の勉強について（複数解答可）。	
	1. 特にリスニングに力を入れたい	2 4
	2. 特にライティングに力を入れたい	6
	3. 特にリーディングに力を入れたい	2
	4. 特にスピーキングに力を入れたい	1 8
	5. 全体的に、総合力をつけたい	9
	6. 英語の勉強の必要性を感じない	0
	7. その他	1
	●外人さんと英語が話せたい。	
11	この授業を受けて	
	1. 英語が、より嫌いになった。	0
	2. 今までと、同じ。	1 7
	3. 少し英語が、好きになった。	1 2
	4. 大いに英語が、好きになった。	1
12	集中コースの組み合わせについて	
	1. 今のまま英語Ia週1回英語Ib週2回の形でよい	2 8
	2. 英語Iaを週2回英語Ib週1回の方がよい	0
	3. その他	2
	●週3回にこだわるのであれば1でもよい。でもIa2回、Ib2回の方がバランスがとれていいと思う。 ●Ib週3回	
13	英語の6単位の取り方について	
	1. 1年で集中的に6単位とる形がよい	2 6
	2. 1年間で6単位はきついで2年（以上）で6単位とる形がよい	2
	3. 2年（以上）かかっても好きなクラスを組み合わせるとる形がよい	1
	4. その他	1
	●6単位にこだわる必要はない。	
【自由意見欄】		
●日常的な会話のリスニングができて注意深く英語を聞くようになった。		
●楽しかった。先生、ノリがいいよ！		
●英語がしゃべれるように集中英語をとったが、本当に昔よりしゃべれるようになった。		

ているのか？

- 授業の仕方はとてもよかったので、とても楽しくできた。このままでやってほしい。
- 英作文課題は教材を写せばできる問題が多かったなので、自分で考える英作文をもっと増やせばいいと思う。
- リスニングの力をもっと付けたい。
- お願いだから単位とらして！
- 英作の時間などもう少し辞書とかを引く時間がほしかった。
- リスニングの力があまり付かなかったような気がするけれども、最初の頃に比べればましになったと思います。
- アキラの話がストーリーがあったので毎週来る気になってよかった。楽しい授業だった。
- 楽しかったです。
- しゃべるのが速い！（教材の中で）テスト・イージーが初めのうち壊滅的だったので単位が取れるか心配だった。
- 教材がストーリー形式だったので楽しんでできてとてもよかった。
- 英語の6単位は取ることが苦ではないが、教養で8単位を取り終えた後でも単位に加えてくれた方が嬉しい。今は8単位以上取っても意味がなくなってしまうので、今後続けてゆく気力がなくなってしまう。
- コンピュータを使った授業は楽しかったです。
- このクラスに限ったことだが、教師、生徒もとい学生に遅刻が多い。やる気のなさを感じる。
- 今までライティングだけでリスニングはほとんどやらなかったのが大変よかった。もっとこの様な授業が増えればよいと思う。
- 割とよかったです。2年以降、英語の授業を取ったりできるのだろうか。
- ありがとうございました。